

生」の字は正木直彦、裏面の「昭和六年四月八日建設」の字は岡田起作の揮毫による。

### ⑧ 岡倉天心記念銅像除幕式

昭和六年十二月六日、岡倉天心記念銅像の除幕式が挙行され、関係者百数十名が参集、孫岡倉古志郎の手で除幕がなされた。次いで建設実行委員田辺孝次の事務経過報告、金沢庸治の六角堂工事報告、建設委員代表横山大観の本校への銅像贈呈の辞、正木直彦の式辞、牧野伸顕の祝辞、遺族代表米山辰夫（女婿）の挨拶があった。その模様は『東京美術学校校友会月報』第三十巻第七号の「芸苑集報」欄に詳しく記されている。建設に至る経緯は左記の田辺の報告（同誌）に簡明に記されている。

事務経過の概要を御報告申上ます。

故岡倉覺三先生銅像建設の議は、久しい以前から有つたのであり



岡倉天心銅像  
（『東京美術学校校友会月報』第30巻第7号より転載）

ますが、愈々機熟して、具體的に成りましたのは、昨昭和五年十月の事であります。正木「直彦」校長、島田「佳矣」、川合「玉堂」の諸教授、日本美術院の横山大観、木村武山、齋隆隆三、帝室博物館の溝口「禎次郎」美術課長、彫刻家小倉右一郎の諸氏に私とが、実行委員に撰ばれて、建設の方法を協議致しました結果、大體は醸金を以つて造る事に決したのであります。

ですが、其募集の範圍は、故先生の薰陶を受けた者と學校關係者を以てしたいと云ふ事から、廣く一般に募集致さなかつたのであります。即ち現に美術學校の教職に在るもの、日本美術院同人、先生に教を受けたもの一同が發起人と成りまして、同年の十一月之を發表致しまして、本年三月末日にメ切つたのであります、幸に諸彦の御賛襄を得まして、横山大観氏外二百七十六名の醸金總計壹萬二千餘圓に上つたのであります。そこで其實行方法を度々協議しました結果、岡倉先生は露出した銅像を御好みにならなか「った」と云ふ事に基きまして、屋根の下に建てやうと云ふ事に成り、先生が東洋美術の鼓吹者でありました關係上、純日本風



岡倉天心銅像安置六角堂（同）

な六角堂を、学校の建築科講師金澤庸治氏に、設計を御依頼致し、其内に、當時の校服を着せられた先生を、御納めする事と決定致しましたので、其原型の製作を日本美術院同人平櫛田中氏に御依頼致し鑄造は阿部胤齋氏に御依頼いたした様な次第であります、幸ひ學校に岡倉先生が校長室で御使用になつた、椅子がありましたので、其椅子の上に腰掛けてをらるゝ、在りし日の面影を髣髴たらしめる様に造られたのであります。正面の板に彫刻されました、*Asia is one* と云ふ文句は、先生の御著書『東洋の理想』の巻頭語を、御令弟の岡倉由三郎氏が揮毫され、平櫛田中氏の彫刻であります。又其裏面の銅板の文字は、正木直彦先生の誤并に書であります、鐫刻は清水龜藏教授に御願ひ致しました。屋根の頂上の擬寶珠は、帝國美術院會員香取秀眞氏に御依頼を致しまして、夫々非常な御盡力を得たのであります。

〔下略〕

かくて銅像は校庭のほぼ中央にある紅葉山（現在地）に建てられた六角堂の中から本校を見つめることとなった。金沢庸治の報告（同誌）によれば、建物は藤原後期の様式に多少近代味を加えた純和風のもので、数百年を経た良質の木曾檜を用い、同年五月十九日起工、同年九月二十三日に落成、施工者は曾我徳造であった。費用および制作期間は「金品寄付ニ関スル書類」によれば次のとおりである。

六角堂 七五〇〇円 昭和七年一月十日着手  
同 年八月二十五日竣工  
原 型 一〇〇〇〇円 昭和七年三月十五日着手  
同 年五月二十八日竣工

鑄造 二四〇〇円 昭和七年六月一日着手  
同 年十月十五日竣工  
石 台 七七五円 昭和六年十二月十五日着手  
同 七年三月十日竣工  
なお、この銅像の建設について、新聞のなかにはこれを従来兎角対立し勝ちであった官展派と院展派の和解の象徴として報じたものもある。昭和六年九月二日の『東京朝日新聞』は「多年の反感を捨て帝展院展兩派の握手 恩師岡倉氏の像を回り美術の秋の快報」という見出しで大きく記事を掲載している。正木直彦が校長を辞任するのはこの翌年である。彼が建設を提案し、鋭意実現につとめたのは、在任中に美術界の禍根を絶ちたいという気持の現われであったのかも知れない。

⑨ 岡倉由三郎を講師に採用

昭和六年十月六日、英語学の泰斗岡倉由三郎（一八六八—一九三六）が英語授業担当講師（無報酬）に採用され、翌七年五月十四日に解嘱されている。しかし、これは全く名目の採用で、米国トロドー市で開催される日本美術（日本画）展覧会に美術使節として岡倉を派遣するためにとられた措置であった。同月八日には早くも岡倉の外国出張の許可が文部省から下りているが、本校が作成した派遣上申案を見ると、出張地は北米合衆国および欧州諸国。期間は昭和六年十月から同七年三月末日までの約六ヶ月間、目的は米国並びに欧州諸国内における美術上の視察研究の爲めと記されており、また、旅費は本校校館費の内より支給とある。

昭和初期には中国、フランス、イタリア、ドイツ、ハンガリーなどで政府肝煎りの日本画展覧会が次々と開かれ、正木直彦は開催に